

家庭科の男女共修をすすめる会

☆発行日 '74. 4. 1

## ☆連絡先

東京都渋谷区代々木 2-21-11

一部 50 円

婦選會館内

TEL 03-370-0238

## 『家庭科の男女共修をすすめる会』

発足に至るまで

◎女子だけ必修の家庭科をめぐる動き

—昭和四八年を中心として—

四八年四月から、全国の高校で女子には家庭科が四単位必修となった。それまでも四単位必修であったが、特別の事情がある場合には二単位にまで減ずることが出来るという付帯条件がついていた。ところが四八年度からは、「四単位を下らない」という表現に変わった。

家庭科が選択制から女子に必修の教科に変  
わった時（三八年）からさまざまな批判が起  
り、現場の教師の中から、なんとかしなく  
てはという声が盛上ったが、それを運動にす  
るまでには至らなかった。つづいて、四五年

に中教審の答申が出され、四八年度からの教育課程の中に男女の特性に応じた教育を盛込み、女子には家庭科を四単位学ばせると出るや、多くの人からの批判があつまり、とりわけ、女子が自立した個人として生きることと望む人達の間からの反発は強かった。しかし残念ながら、この男女特性論の教育課程を変える程の力はこの組織も發揮出来ずに、そのまま四八年を迎えてしまった。しかし、唯一つ例外の地域があったこと付け加えておきたい。それは京都府である。京都府の高校の家庭科教師グループは、中教審のこのような答申を予想し、家庭科教育の姿はどうあったらよいかと研究を重ね、「家庭一般では、

## もくじ

○「家庭科の男女共修をすすめる会」発  
足に至るまで

△女子だけの家庭科をめぐる動き

「家庭科教育検討会」

△「家庭科の男女共修をすすめる会」誕生

△アビール

▲発起人三名伊藤昇さんを訪問 P8

▲男女共修——文京高校の場合

▲ 日教組教育研究全国集会

「家庭科分科会」の報告 P7

○家庭科の男女共修をすすめる会への反響

○会のメモ  
その他

家庭生活に対する基本的で多面的な認識を深めるとともに、生活を高め、新しく創造していくことの出来る実践力を男女ともにつけさせることをねらいとしたい」と府教委に男女共修の家庭科の必要性を主張した。府教委もそれを認め、四単位のうち二単位は男女共修の教育課程を出した。

こうして四八年四月から、家庭科は、女子四単位必修でスタートしたが、批判の声も次第に大きくなってきた。四八年二月五日のNHKテレビ「こんにちは 奥さん」では、女子四単位必修の家庭科をめぐって、文部省の担当官、評論家、主婦の三者で討論が行なわれたが、出席した主婦のほとんど全員が、女子だけに必修の家庭科には反対した。

新学期がはじまってすぐの、四月二三日朝日新聞、月曜寸評では、現場の家庭科教師が、新入生に、家庭科は女子だけの必修だということがどんなにつらいかと述べ、また高校二年の女子からは、「女子だけの家庭科は女子生徒に対する差別であり、現場の教師は一体この事実はどう立向っているのか」と疑問が投げかけられた(ひととき)。それに対しては、一教師から、「決してこの問題をみすごしているわけではない。職員会議や、教研集

会で問題にしている。高校生もこの問題を考

える会を作ってほしい」と答えがのせられた。また毎日新聞も五月三日に、「なぜ女子だけ? 高校「家庭科」を特集した。特集したきっかけは、女子生徒からの抗議の投書からだという。抗議の投書をした女子学生は言う。『二年生から、芸術を選択出来ると思っ

ていたら、女子には家庭科必修、男子だけは自由に芸術をとれるんです。どうして差別するのでしょ男子もせっかく共学なのに、男子だけで芸術をやってもつまらないと言ってます。』月刊「婦人展望」では、三月号から五月号まで、三回にわたり、「女子だけに四単位必修の家庭科は女子教育にとって何を意味するのか」と追求した。第一回は男女特性論の背景、第二回は京都府で二単位男女共修に至るまでの経過、第三回は女子だけに家庭科必修ということ、憲法、教育基本法に違反するものではないか、「家庭科を考える会」を作り、何らかの闘いを起したらというものであった。

八月七日から九日まで京都で開かれた「家教連」主催の研究集会では、約五百名の参加がみられ、京都の共修をはじめとして、共修の問題等が、高校生、大学生、母親もまじえ

て話合われた。

また、新宿のリブセンタでも、数回にわたって「何故女子だけに家庭科が必修なのか」のティーチ、インが開かれ、八月の式根島の合宿でも「家庭科」の分科会が作られた。

『家庭科教育』九月号は家庭科の男女共修をめぐって、実践例や、考え方が展開された。その中で、母親から、「家庭科こそ絶対に男女共修で」という意見が寄せられ、特に三〇年頃、都立白鷺高校で始められた男女共修の家庭科が受験体制や、その他の事情でつぶれてしまったのは惜しい。もし白鷺を応援するような形で他校が続いたら、つぶれていなかっただけでなかつたかと思念がわいている。

婦人問題懇話会でも九月末、「家庭科教育」の例会を開き、京都府の男女共修の指導資料にも関心が高まり、又現行の家庭科の教科書を検討してみようという声も出された。

以上は、新聞や、雑誌という目につくものを大雑急にひろいあげたにすぎないが、四八年は、いやがうえにも家庭科の問題はクロームアップされてきた。各地で、又各世代からのこうした声を寄せ集めて、今後女子だけの家庭科をどうしたらよいかを考えていくということになり、暮の一二月八日に婦人会館

で「家庭科教育検討会」が開かれた。(中嶋)

### ◎「家庭科教育検討会」開かれる

何人出席があるかと危惧と期待を持って六〇人分位の椅子を用意したが、結局入りきらず九三人もの人で会場は超満員。

はじめに「家庭科教育検討会」を主催する形となった婦人会館の理事長市川房枝氏の挨拶について三人の講師はつぎのようにそれぞれ見解をあらわにした。

半田たつ子氏「月刊「家庭科教育」編集主任」「自分も含めて家庭科教師の現状は婦人問題の集約であり、根の深い被害者意識を持ち、本質的な問題に取り組みむとを失っているがまず家庭科の教育内容をゆるぎないものにしていく必要がある。私は人間的に生きるための基礎条件とは何かを根幹として暮らしたのサイドから社会に向けて要求すべきことを学ぶのが家庭科教育の原点である。これを女子だけが学ぶだけでなく男子も学ぶ必要がある。」

小笠原ゆり氏「文部省初・中局職業教育課調査官」現行の小・中・高の家庭科の説明のあと「能力的に女子が男子よりも劣っている

とは思われないが、歴史的に数万年にわたって男女の分業があり、現在も社会的慣習その他について区別があることはあきらかである。男は男らしく、女は女らしく教育することは特別批判されるべきことではない。

和田典子氏「戸山高専家庭科教諭」「生徒から①制度の上でなぜ男女の差をつけるのか

②家庭科はなぜやる程大事な科目かと思う。しかしどの問題をとり上げて女子だけで解決がつかないのになぜ女子だけが学ぶのか

③男子も家庭のことに関心をもっているのに勉強する場がない等の意見が出された。これは私の言いたいこと、まったく同じである。文部省は男子の家庭科学習をはばむものではないというが学習指導要領をみるとそれが無理なことはあきらかである。制度の上で男女共修を実現することがまず先決である。」

現場教師、学生、はたらいっている女性、ジャーナリズムにたずさわる男女の参加者から、男らしさ、女らしさについて小笠原氏に質問が集中した。これを受けて小笠原氏は「現段階で男が家事を女と同じようにするのは無理である。女は女でなければ出来ないことにもっと誇りを持つべきである」と考えをのべ定刻がすぎたのでと退場された。

このあと全体討議では「今の教育は子どもを忘れているところがないか、いつも審議会

の答申に添って改革が行われてきたのだが、審議会のメンバーは過去の家族制度の中で育った人たちである。現在の先生が子どもたちのねがいを吸いあげて改革していかねばならない。伊藤昇氏」「教育が未来産業という考え方は、教育は投資という考え方と一致する。家庭科の未来をどうとらえるか問題。田中寿美子氏」「指導要領の法的拘束性にもかゝらず男女共修ができない責任を現場の教師・父母に転嫁している。家庭科教師」

「男は仕事。女は家庭ということを仕組んでいるのは政府でそれを支えているのが文部省ではないか」「家庭科のみならず受験体制そのものを考えて行かなければ解決できない」「市民が男女共修運動をおこすことが必要」

などなど活発な意見がとび出し予定時間を一時間オーバーして、閉会。「家庭科男女共修をすすめる会」の運動団体をつくることとなり準備委員数名がきまった。

当日行なわれたアンケート調査の結果の概略はつぎの通りである。(当日の回答者は四名)

男は技術。女は家庭科と別れている中学の

家庭科教育についてどう思いますか

①今のままでよい 0

②廃止すべきだ 二名(四%)

③男女いっしょに学ぶようにすべきだ 三九名(八八%)

④男女は別でよいが、内容を改めるべきだ 二名(四%)

⑤その他 二名(四%)

注③に○印をつけ内容の検討も必要と書いた人が四人あった。

※女子だけ四単位必修の高校家庭科教育についてどう思われますか。

①今のままでよい 0

②廃止すべきだ 一名(二%)

③男女とも必修にしていっしょに学ぶべきだ 二九名(六四%)

④男女とも選択にすべきだ 一五名(三三%)

⑤女だけ必修でよいが内容を改めるべきだ 0

尚このアンケートには自由記入の項を設けたがその中につきのようものがあつた。

「私自身が女子四単位必修の矛盾の中で教育をうけ、この状態を何とかしたいと思ひ、高校教育にたずさわる中で女性解放と家事労働の社会化をすすめる中で生活人としての家庭科を全教育体系を変えようと考えています。一教師・女」

「家庭科教師はどんな事をいっても、性差別の加担を、現状ではしているという事をいつも自己批判しなければと思う。既成の学問概念で割り切ったカリキュラムの課程には問題がある。そこからはみ出て総合科学的な意味をもっている課程を考えることが出来たのなら、今ある「家庭科」が、一つのふみ台になるのではないかと公務員・女」

「現場で自主カリキュラム編成により男女共修を実現していただきたい。親としてはそれを全面的に支持する運動を起せようと思う。それに押しつけが加えられれば法廷に出すことも考えられる一弁護士・女」

「学校での男女差別のない教育を望むことはもちろんですが、現在子供を育てている母親自身の姿勢もとても大切だと思います。ここにあらわれるのは少数派で、これを市民一般の声とするのは、また別の大変な努力が必要のように感じた。一編集者・母親」

「男女共修を唱える教師等が実際の家庭生活で、どの程度男女共修のために闘っているか、問題はそこです。一社会員・男」(塚本)

### ◎「家庭科の男女共修をすすめる会」誕生

家庭科問題検討会のあと、有志により「家庭科の男女共修を進める会」の準備会が組織され、一月二六日に結成集会の運びとなった。まず、発起人代表として市川房枝氏は、

「家庭科の男女共修は教育問題であるが婦人解放につながる問題である。今日婦人の地位はあと戻りの感があり、それは家庭科における良妻賢母教育にも原因がある。この運動が婦人解放運動の再出発となるよう望む」と挨拶。会の結成に至る経過報告のあと、運動方針について活発な話し合いが行われた。

「運動の中に学習が循環していなければならぬし、それぞれの立場で具体的に共修内容について検討したい」「教師と、地域の教育を支える人々との話し合いの体制を確立する必要がある」「教科書では、共修の申し入れがなかったと言っている。とにかく、一部の声ではないことを示さなければならぬ」などの意見も出、行政をはじめ、父母、教師、学生、生徒、組合など広く国民全体への呼びかけとともに、教育内容も検討していくことが決議された。

これらに関連した討論の中で多くの賛同の

### 家庭科の男女共修をすすめる会への反響

関心を、ほくは持っております。そうじにしても「女がそうじをするものだ。」とおっしゃっていた先生が高校時代にいらしたこともあり資料を送っていただきたいと思ひます。

(北海道紋別郡・男)

× × ×

私は高校二年生で今日やっと学年末試験が終了しました。一応家庭科も二年間で修了したのです。私の学校は全く普通科だけで私の学年までは二・三年とコースクラス編成です。そこで不思議なことがあるのです。それは女子七人ほど理科系コースで二年の家庭科は全々うけていません。つまり「女の仕事」を免除してやる的な考え方から、特別に切り捨て論を認めているのです。その他、別の理科コースでは女子が家庭科の時に物理の問題を男子はするなんていうことがあったり、ゆがみがひどいのです。

とにかく、これらのゆがみを直して行くには、平等に教育をうける権利

を主張して行くべきだと思います。

まずは「家庭科の男女共修をすすめる会」の入会方法など教えて下さい。

(西宮市・女子高校生)

× × ×

先日の朝日新聞、若者の欄にて貴会のことを知りお便り致します。

御指摘のように、日本の教育の在り方は、

いろいろな面で沢山の問題を含んでいると思ひます。家庭教育の面における男女の差別などもその一例であるようです。私個人としては、従来の男性社会、家長制度の強固と感じられるのですが、如何でしょうか。男は社会、女は家庭にと、半分前の事しか出来ない人間を創り出すと同時に、女性の社会進出を拒もうとするかの如き教育のようです。貴会に参加したく、詳細をお知らせ下さい。

(摂津市・女)

☆家庭科の男女共修をすすめる会発起人名  
青木千枝子(日本橋高校) 市川房枝(婦選会館) 落合トア子(主婦) 梶谷典子(NHK) 駒野陽子(一つ橋中学) 佐藤慶子(消費生活コンサルタント) 島田道子(NHK) 塚本しり子(婦選会館) 中嶋里美(所沢高校) 半田たつ子(家政教育社) 馬場洋子(婦選会館) 樋口恵子(評論家) 和田典子(戸山高校)

### おねがい

☆ 会計報告は紙面の都合上、次号にまわってしまいました。しかし発起人一同運動とはお金のかかるものと慨嘆して居ります。多くの方々に御支援をいただいておりますが、ひきつゞきカンパをおねがいします。カンパは直接左記にお振りこみいただければ幸いです。

協和銀行新宿西口支店普通預金

七〇二二四九

または二〇〇円切手で、

151渋谷区代々木二ノ二婦選会館内

「家庭科の男女共修をすすめる会」へ

☆ 活動のひとつに署名簿があります。右のところに、ご請求ください。たゞちにお送り下さい。

☆ ニュース第一号でいろいろ不手際もあると思ひます。ご意見・ご批判をお寄せ下さい。また総ごころのある方カットなど書いて下さいませんか。宛名かき・名簿整理など労力奉止も大歓迎です。

(発起人一同)

## 家庭科の男女共修をすすめる会への反響

私は現在、大阪府立北野高校の二年生です。

今年でもう家庭科というものから解放されるのです。本校で家庭科は女子に必修科目となっており男子には、希望者がクラスを編成するに足る数に達した場合のみ授業を行うという事になっていました。が現在女子が家庭科をやっている時間に男子は体育をそして二年では男子は芸術科目をやっています。そして女子は二年でできなかった芸術科目を三年になつてから、男子が六時限で帰宅するところさらに八時限まで残ってやらなければならない、ということになっていきます。

何のために女子のみが家庭科を学習するのでしょいか、家庭科の存在価値すら私には理解できません。禁止を叫びたいくらいです。家庭科という学科に存在価値があるとするならば、それは当然、男女ともに通じるものであるはずで。

教科書には明らかに女性を家庭に縛りつけておこうとする記述が記さ

(大阪府・女子高校生)

秋山ちえ子氏より

前略、私もかねがねこのことについては関心があり調べたり話したりしておりますので、まずまずの御研究を心から支持致します。ひとこと、云わずものこともありませんが、京都府の場合は昨年の四月から府立の大本高校、網野高校の二校がテスト的に家庭科を二単位(指導要領は四単位)にして男女生徒の必修としてはじめました。内容は実技なしで、社会的な倫理社会、家庭の科学的理解等と致したとのことでした。昨年、年末に、このことに対しての批評感想をききましたら、どうも中3のくり返しのものが多く興味がない(生徒)どうせ有名校に入学する生徒がいないからこんなことをするのだろう(親)学校側ももっと建設的な意見がきかれるかと思いましたが、それでもなく(といってもこれは私が直接調べたのではなく、依頼してきいてもらったもの)といった様子でした。人間が生きていること全体にかかわりあいのある学科ですが、どうも基本的なところで考え方が確立されず、従ってカリキュラム、家庭科教

師の養成そのものにも問題が山積みだと思います。その点をどうかえてゆくかか聞いています。

(以下略)

(日本社会事業大学サークル婦人口論)

こんにちは。私は高校二年の女子です。市内の女子校へ通っていますが、現在学校で行われている家庭科教育に、不満をもっています。女子だけが、高校教育で、家庭科を学ぶというのは、偏見だと思いますし、又内容も貧しく中途半端なものがほとんどです。もっと本当の社会生活に結びついた教育がされるべきだと思います。

(姫路市・女子高校生)

家庭科を男女共修にVを読みしました。

声があった。「京都府などすでに共修に踏みきっている所では、生徒は当然の事と受け止めて、他の授業にはない人生や生活についての具体的現実問題を扱うので有意義だと言っているし、教師側からも実施してよかったとの声が多い」「共修を進める中で、教育内容などについて教師自身も再検討を迫られるだろうから良いことだ」「家族や家庭生活での男女の認識が深まれば女性の解放につながる」

しかし一方では、今後の検討課題も提起された。「京都府では、共学制、総合制、小学区制という高校三原則が遵守されており、男女共修実施への条件が整っていたが、進学校ほど困難で、共学制すら難しいのが現状だ」と、教育制度の根本問題にふれての深刻な悩みが訴えられ、入試制度改善要求にまで議論が及んだ。が、これに対しては「真の男女共修は、正常な教育制度の中でしか行えないものだ。男女共修は目的ではなく民主教育実現のための一過程である。この運動はその突破口として位置づけるのではないか」という事で、息長く教育の民主化への闘いを進めることを確認した。

また、中教審答申に対応した日教組の教育制度検討委員会で、教科の再編について教科

教育、総合学習、教科外活動の柱を立て、現行家庭科の内容は他教科に分散するという構想を打ち出していると紹介されたが「国民の教育権を主張する立場での到達目標としても分散論は納得できない。家庭科教育の歩みをふまえて女性の歴史としてつづけていくべきではないか」との疑問も残している。また「家庭科は、分析的科体系を生活の場に適用し現実の問題について総合的に学習していく教科である」とする家教連の考え方が示された。週五日制に伴う家庭科削減の動きもあり、今後の運動に大きな問題が控えているといえよう。最後に、アピール文が多数の拍手により承認され、当面の運動として行政機関に働きかけるための署名とカンパを集める事、その他広く賛同者を求める事を約して閉会となった。

(森)

私たちは、今、大きな曲り角にさしかかっています。

生産の拡大ばかりが追求されて来た結果、公害にとりかこまれ、資源不足につきあたり、生活は破壊されようとしているのです。私たちは、ここで、生活というものをしっかりみ

つめなおす必要があります。そして、これは、もっと生活を大切にしようとする人間を育てて行かなければなりません。生活のことを学ぶ上で、家庭科は重要な教科です。その家庭科が、今、中学では技術・家庭科となつていますが、実際には、男子は技術、女子は家庭と男女別々の内容を学んでいます。また高校では「家庭一般」が女子だけ必修になっているため、男子は中学、高校でも、家庭に関することは殆んど学んでいません。協力し合つて、よい家庭、よい社会を築きあげて行くためには、いっしょに家庭科を学んで、男女とも、生活についてのしっかりした知識、技術、考え方を身につける必要があります。

法ならびに教育基本法にうたわれている男女平等の精神にも適うことです。すでに京都の高校をはじめ、各地の中学、高校で共修の試みがすすめられています。が、わたくしたちは、日本のすべての中学、高校で家庭科の男女共修が行われるようになることをめざして行きたいと思ひます。そのために、当面、私たち

一、教育課程審議会に働きかけて、昭和五十一年の答申の中に家庭科の男女共修をもりこ

んでもらいます。

二、東京都をはじめ可能な自治体で家庭科の男女共修が実現されるよう働きかけます。

三、できるだけ大勢の人に男女共修の意義を理解してもらえよう働きかけます。

## ☆☆男女共修

### ☆☆文京高校の場合

家庭科の男女共修を進める場合の参考として、東京都の全日制高校の中で現在ただ一校家庭一般の前半二単位を男女必修にしている文京高校の実状を調べてみました。

名称は家庭科ではなく生活科となっています。名称を生活科とした意識的な理由としては「父母、男子生徒、社会により強い関心と理解を求める気持と、名称を変えることで時代に即応した教科内容を盛り込み、偏見なしに授業が展開できること」をあげています。

そして、従来の家庭一般にくらべて意欲的にめざした目標としては「広い視野に立った生活環境の理解を得させること、きびしい自然ないし社会環境の自覚を与えること、高度化し加速的に変化しつつある社会機構への主

体的適応性を身につけさせること、多様な価値観の中で自主的な生活態度を選択させること、将来を見通した観点から現実を生きることを学ばせること」となっています。

教科内容は、家庭一般の教科書を参照するとか、辞書的な役割を果す素材の一部として批判的に活用すること。究極的には生徒の創造的な自主性を涵養することを目的にしている。具体的な授業の展開としては、経済、社会、家庭機能、衣食住とに分けられ、それぞれの部門において授業計画の内容を必要以上に多くして、教師と生徒との授業展開の中で項目の選択の自由がきくようになっていく。

そして、実際に授業を開始して、生徒の反応がどうであったかを知る手がかりとして、一学期の終了の時に感想文を書かせている。その中の生徒の意見として「中学の家庭科を連想していたら具体的に生活に役立つものが多い」「今まで何んとも見すごしてきたことにも関心を持つようになった」「もっと一つの問題に時間をかけて掘り下げてもらいたい」「教師が一方的に話さず、もっと生徒に討論させてもらいたい」「他校の友だちと話した時、話題が豊富にあるので生活科のことを自慢している」「他の授業では教えられな

いものを与えられ、人生を考える基礎が出来た」などがある。教師は、この生徒の反応を反省材料として、授業内容の改革を行って行く。

しかし、現在の女子だけ家庭科四単位必修という制度の中で、女子向きにだけ作成された教科書を使用している男女共修は、出発の時点ですでに不自然さがあるのだが、文京高校の例にも見るように教科書を参考文献として、教師と生徒とのコミュニケーションで教科内容の検討がなされ、現実に直面している問題に即応した授業が出来るという可能性もある。学校教育の中で不満が教科書どおりの無味乾燥にあるとしたら、家庭科という生活を基盤とした教科の中で、教師と生徒が相互の問題意識で構築してゆく授業であれば、そこにこそ学ぶ意味があり、人間の生活があると思う。

女子向きだけの教科書の中で男女共修を進める現実的な壁を、積極的に打破する原動力としては、自分たちが考えている問題を提起することによって学び取ってゆくことしかないと思う。家庭科という疎外されてきた教科を、人間味のある生きた教科にするためにも。そして、文京高校にみるように、私たちがひ

どく神経質に懸念するほど男子生徒からの反発のない現実も、もう一度認識する必要がある。そして、男も女も自立した人間として生きられる基盤を家庭科の男女共修を進めることから実現してゆきたいものである。(落合)

### 日教組 教育研究全国集会

#### 家庭科分科会報告

##### 概況

さる一月下旬、山形市山交ビルでひらかれた分科会には、北海道から沖縄にいたる各都道府県代表の正会員一名に傍聴者を加えて、連日約二〇〇名の参加者がありました。

参加者の学校種別は大多数が公立校ですが、今年は私学の代表も一名を加えて、小・中・高の人数もほぼ均等で、傍聴者に男性が多かった点も特徴的でした。

討議は四日間つづけられましたが、主な内容は左記の通りです。

- 1 家庭科をめぐる問題状況  
職場、地域、子ども、家庭をめぐる
- 2 授業実践の交流、検討(小・中・高分散会にわかれて、家庭科の内容・方法討議)
- 3 自主編成をすすめる上での要点につい

##### ての研究協議

- ①家庭科の位置づけ ②系統性 ③生活とのかかわり
- 4 これからの研究・運動をどうすすめるか
- ①学級集団づくり ②職場づくり ③生活を守る運動とのかかわり ④組織的な教育研究運動のすすめ方など。

##### 討議のなかから

四日間の討議のなかから「男女共修」にかかわる二、三の事項をとり上げますと、

1 中学校では、技術・家庭科が高校の入試科目に入っている場合は「共修」がきわめてむづかしいということです。(神奈川など)

2 中学校技術・家庭科の共修をすすめるうとする場合、現行の毎学年三時間のなかで両者の内容をどう編成してゆかという問題があり、そのとりくみには

- ①技・家の内容を「技術教育」ということで一本化し、家庭科の内容は「布加工」「食品加工」として位置づけようとするやり方
- ② 技術科、家庭科を並行してともに共修にするやり方
- ③ 技・家科の内容のうち、製図、機械、

電気などの共通部分だけを共修にして、衣食住や保育などは女子だけが学習するやり方などの実践がすすめられています。現段階では各学校の状況に応じて、できることから実践してゆこうという点では統一できた。

3 高校の場合は、学校格差が拡大し、ふりわけられて入学してきた生徒たちを、どうしたら学習に参加させられるかというこの問題が大きく、共学のなかで共学が駄目になり、別学は別の荒廃を生むなどの悩みが、各地から訴えられていました。

4 家庭科の共修についての調査(岩手・石川)では、生徒は半数以上賛成、男子もやる気があるが、母親は「女子のみ」が多く、特に「家事処理」を男子にやらせるかどうかについては意見がわかれていました。

5 家庭科の本質については「現実の生活現象を教材として、他の教科で、その経験を土台にしてそこからまた、基礎的な学習にもどしてゆく」という総合学習の理念にあたることでほぼ統一しましたが、一部には「技術教科」として人と物との対応部分に限定すべきかという意見もありました。いづれにしても「人間それ自身の生産の場」である「家庭生活」をよりよくするために、く

# 発起人三名伊藤昇さんを訪門

家庭科の男女共修の問題が、東京都で今  
 どう扱われているか知りたいたと、和田、半  
 田、梶谷の三名は、二月九日、都教育委員  
 の伊藤昇さんを訪問しました。

今は共修をすすめるチャンスだと、伊藤  
 さんは大変あかるい口ぶりでした。ちょ  
 うど、高校教育が大いに問題にされているか  
 らです。高校の多様化の失敗を文部省も認  
 めようとしており、都では学校群制度を改  
 めることが検討され、高校全入運動など、  
 市民の間でも高校教育を考えようという動  
 きが大きくなって来ているとのこと。それ  
 らの市民運動とも連帯しながら、家庭科共  
 修の運動も大きくすすめて行きたいものです。  
 都の教育委員会でも、すでに、高校での  
 共修のことは話題になっており、共修に反  
 対という発言はなく、都指導部の方で検討  
 をすすめるという段階にまでなっている  
 のこと。私たちは、これからもしつこく関  
 係方面との話し合いを続けたいと思います。

(梶谷記)

らしをとりまく自然や社会、くらしの土台に  
 なっている現在の生産関係も視野に入れな  
 ら、子どものわかる道すじにそって、内容を  
 選び、系統化してゆくことが重要であること  
 が確認し合われました。(和円記)

＊ ＊ ＊

★12・8 家庭科教育検討会

☆12・12 サンケイ「家庭科は女だけのもの  
 か」『男女共学』が本筋  
 高校女子必修に反論続出

☆12・20 東京新聞「必要な家庭科男女共修」  
 樋口恵子

☆1・26 「家庭科の男女共修をすすめる会」  
 発足

☆1・27 毎日新聞 男子にも「家庭科」を  
 「共修をすすめる会」スタート

☆1・28 読売新聞 家庭科男女共修をすす  
 める会自治体へ働きかけ結成集会で  
 決める。

☆1・30 朝日新聞 広がる男女共修運動  
 進学体制そのものにメス「すすめる  
 会」が発足

☆1月号 月刊 消費者 家庭科は男女共学  
 に 樋口恵子

☆1月号 日刊 婦人展望 家庭科教育検討  
 会開かれる

☆2・5 N E T 奈良且モ一ニグショ  
 に樋口恵子・和田典子が小沢遼子氏  
 文部省職業教育課長、高瀬広居氏ら  
 と出演。家庭科共修について討論

☆2・5 ラジオ午後のロータリーに半田た  
 つ子出演 家庭科共修について話す

☆2・7 新婦人しんぶん「家庭科の男女共  
 修をすすめる会」が発足

☆2・11 神奈川新聞 各地で広がる高校家  
 庭科の「男女共修」(塚本しう子)

☆2・18 読売新聞 家庭科女子だけ必修は  
 差別だ (梶谷典子)

☆2・22 毎日新聞 ひと「家庭科の男女共  
 修を進める会」発起人 和田典子  
 大石修而氏(理産審委員)と佐藤

☆2・24 中嶋・和田面会  
 ・日本教育新聞 充実した家庭科に  
 「男女共修」には賛成 前野義夫氏  
 (小学校長)家庭科共修のすすめ  
 こきかおる氏

☆2月号 月刊 家庭科教育 家庭科教師の  
 開眼を  
 ☆2月号 婦人展望 「家庭科の男女共修を  
 すすめる会」発足

次回のお知らせ  
 とし、四月二〇日(P M 1・30)4・30)  
 ところ・婦人会館(T E L 三三〇一〇三三)  
 テーマ・「私は中・高の家庭科男女共修の内容を  
 どのようにすすめているか」  
 講師・鯨井あや(新宿区立落合第二中)交渉中  
 真鍋みつ子(和光学園)